

日蓮大聖人御書全集

さんだいひほうほうじょうじ

三大秘法稟承事

さんだいひほうしやう

（三大秘法抄）

新版
1384
ゝ
1388

さんだいひほうほうじょうじ

さんだいひほうしろう

三大秘法稟承事（三大秘法抄）

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

おおたじょうみよう

弘安 4 年（'81） 4 月 8 日

60 歳

大田乗明

そ

ほけきよう

だいしち

じんりきほん

い

よう

夫れ、法華經の第七の神力品に云わく「要をもつてこれ

い

によらい

いっさい

しろう

ほう

によらい

いっさい

じざい

じんりき

を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、

によらい

いっさい

ひよう

ぞう

によらい

いっさい

じんじん

じ

みな

如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事は、皆この

きよう

せんじけんぜつ

とうんぬん

しやく

い

きようちゆう

經において宣示顯説す」等云々。釈に云わく「經中の

ようせつ

よう

しじ

あ

とうんぬん

要説、要は四事に在り」等云々。

と

と

ようごん

ほう

なにもの

問う。説くところの要言の法とは、何物ぞや。

こた

い

そ

しやくそんしよじようどう

しみさんぎよう

ないし

答えて云わく、夫れ、釈尊初成道より四味三教、乃至

ほけきよう こうかいさんけんいち せき た りやくかいごんけんのん と たま

法華經の広開三顯一の席を立て略開近顯遠を説かせ給

ゆじゅつぽん ひ たま じつそうしようとか そのかみ

いし涌出品まで秘せさせ給いしところの、実相証得の当初

しゅぎよう たま じゅりようほん ほんぞん かいだん だいもく ごじ

修行し給いしところの寿量品の本尊と戒壇と題目の五字

なり。

きようしゅしやくそん ひほう さんぜ かく な ふげん もんじゅとう

教主釈尊、この秘法をば、三世に隠れ無き普賢・文殊等

ゆず たま いげ ひほう

にも譲り給わず。いわんや、その以下をや。されば、この秘法

と たま ぎしき し さんぎよう ほけきよう しやくもん

を説かせ給いし儀式は、四味三教ならびに法華經の迹門

じゅうしほん こと しょご どの じゃつこうほんぬ こくど のう

十四品に異なりき。所居の土は、寂光本有の国土なり。能

ご きようしゅ ほんぬ むさ さんじん しょけ どうたい

居の教主は、本有無作の三身なり。所化もって同体なり。

みぎり

くおんしょうよう

ほんけんぞく

じょうぎようとう

し

かかる砌なれば、久遠称揚の本眷属たる上行等の四

ぼさつ

じゃつこう

だいじ

そこ

めい

ふぞく

菩薩を寂光の大地の底よりはるばると召し出だして付嘱

たも

どうせんりつしい

ほう

くじよう

ほう

よ

ゆえ

し給う。道暹律師云わく「法これ久成の法なるに由るが故に、

くじよう

にん

ふ

とううんぬん

久成の人に付す」等云々。

と

い

ぞく

ほうもん

ほとけ

めつご

問うて云わく、その嘱するところの法門、仏の滅後にお

とき

ぐつう

たも

いては、いずれの時に弘通し給うべきか。

こた

い

きよう

だいしち

やくおうほん

い

のち

ごひやくさい

答えて云わく、経の第七の薬王品に云わく「後の五百歳

うち

えんぶだい

こうせんるふ

だんぜつ

とう

の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなかれ」等

うんぬん

つつし

きようもん

はいけん

たてまつ

ほとけ

めつ

ごしょうぞう

云々。謹んで経文を拝見し奉るに、仏の滅後正像

にせんねんす

だいご

ごひやくさい

とうじようけんご

びやくほうおんもつ

とき

二千年過ぎて、第五の五百歳、鬪諍堅固・白法隱没の時

うんぬん

云々。

と

い

そ

しよぶつ

じひ

てんげつ

きえん

問うて云わく、夫れ、諸仏の慈悲は天月のごとし。機縁の

みずす

りしよう

かげ

まんき

みず

うつ

たも

水澄めば、利生の影をあまねく万機の水に移し給うべきと

しろうぞうまつ

さんじ

なか

まつぼう

かぎ

と

たま

ころに、正像末の三時の中に末法に限ると説き給わば、

きようしゆしやくそん

じひ

へんぱ

に

教主釈尊の慈悲において偏頗あるに似たり、いかん。

こた

しよぶつ

わこうりもつ

つきかげ

くほうかい

やみ

て

答う。諸仏の和光利物の月影は、九法界の闇を照らすと

ほうぼう

いつせんだい

じよくすい

かげ

うつ

しろうほう

いえども、謗法・一闡提の濁水には影を移さず。正法

いつせんねん

き

まえ

しろうじよう

ごんだいじようあいかな

ぞうほう

一千年の機の前には、ただ小乗・権大乘相叶えり。像法

いっせんねん

ほけきよう

しやくもん

きかんそうおう

まつぼう

はじ

一千年には、法華經の迹門、機感相応せり。末法の始めの

ごひやくねん

ほけきよう

ほんもんぜんごじゅうさんぼん

お

五百年には、法華經の本門前後十三品を置いて、ただ

じゆりようほん

いっぽん

ぐつう

とき

きほうそうおう

寿量品の一品を弘通すべき時なり。機法相応せり。

いま

ほんもんじゆりよう

いっぽん

ぞうほう

のち

ごひやくさい

き

た

今この本門寿量の一品は、像法の後の五百歳の機なお堪

はじ

ごひやくねん

しようほう

えず。いわんや始めの五百年をや。いかにいわんや、正法

き

しやくもん

ひあさ

ほんもん

まつぼう

い

の機には、迹門なお日浅し、まして本門をや。末法に入つ

にぜん

しやくもん

まった

しゆつりしようじ

ほう

もつぱ

て、爾前・迹門は全く出離生死の法にあらず。ただ専ら

ほんもんじゆりよう

いっぽん

かぎ

しゆつりしようじ

ようほう

本門寿量の一品に限って出離生死の要法なり。これをもつ

おも

しよぶつ

けどう

まった

へんばな

とううんぬん

て思うに、諸仏の化導において全く偏頗無し等云々。

と ほとけ めつご しょうぞうまつ さんじ ほんけ しやつけ

問う。仏の滅後、正像末の三時において、本化・迹化の

おのおの ふぞくふんみよう じゆりよう いっぱん かぎ まっぼうじよくあく

各々の付嘱分明なり。ただ寿量の一品に限って末法濁悪

しゆじよう 言 きようもん ふんみよう

の衆生のためなりといえる経文いまだ分明ならず。たし

きよう げんもん き

かに経の現文を聞かんと欲す、いかに。

こた なんじ と き のち かた しん と

答う。汝あながちにこれを問う。聞いて後、堅く信を取

じゆりようほん い よ ろうやく

るべきなり。いわゆる、寿量品に云わく「この好き良薬を、

いまとど お なんじ と ふく い うれ

今留めてここに在く。汝は取つて服すべし。差えじと憂う

とううんぬん

ることなかれ」等云々。

と い じゆりようほんもっぱ まっぼうあくせ かぎ きようもんけんねん

問うて云わく、寿量品専ら末法惡世に限る経文顯然な

る上は、私に難勢を加うべからず。しかりといえども、三

大秘法、その体いかん。

答えて云わく、予が己心の大事これにしかず。汝が志

無二なれば、少しこれを云わん。

寿量品に建立するところの本尊とは、五百塵点の当初

より以来、此土有縁深厚、本有無作の三身の教主釈尊こ

れなり。寿量品に云わく「如来の秘密・神通の力」等云々。

疏の九に云わく「一身即三身を名づけて『秘』となし、三身

即一身を名づけて『密』となす。また、昔より説かざると

ころを名づけて『秘』となし、ただ仏のみ自ら知るを名づ

な

みづか

し

な

けて『密』となす。仏、三世において等しく三身有り。諸教

な

ひ

つた

とううんぬん

の中においてこれを秘して伝えず」等云々。

だいもく

ふた

こころあ

しょうぞう

まっぼう

題目とは二つの意有り。いわゆる正像と末法となり。

しょうほう

てんじんぼさつ

りゅうじゅぼさつ

だいもく

とな

たま

正法には、天親菩薩・竜樹菩薩、題目を唱えさせ給いし

じぎょう

とな

や

ぞうほう

なんがく

てんだい

かども、自行ばかり唱えてさて止みぬ。像法には、南岳・天台

とう

なんみょうほうれんげきよう

とな

たま

じぎょう

ひろ

等、また南無妙法蓮華経と唱え給いて、自行のためにして広

た

と

りぎょう

だいもく

く他のために説かず。これ理行の題目なり。

まっぼう

い

いま

にちれん

とな

だいもく

ぜんだい

末法に入つて、今、日蓮が唱うるところの題目は、前代に

こと じぎよう けた わた なんみようほうれんげきよう みよう たい
異なり、自行・化他に亘つて南無妙法蓮華經なり。名・体・

しゅう ゆう きよう ごじゅうげん ごじ
宗・用・教の五重玄の五字なり。

かいだん おうぼうぶつぼう みよう ふつほうおうぼう がつ おうしんいちどう

戒壇とは、王法仏法に冥じ、仏法王法に合して、王臣一同

ほんもん さんひみつ ほう たも うとくおう かくとくびく むかし

に本門の三秘密の法を持つて、有徳王・覺徳比丘のその乃往

まつぼうじよくあく みらい うつ とき ちよくせん みぎようしよ もう

を末法濁悪の未来に移さん時、勅宣ならびに御教書を申

くだ りようぜんじようど に さいしやう じ たず かいだん

し下して、靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を

こんりゅう とき ま じ かいほう もう

建立すべきものか。時を待つべきのみ。事の戒法と申すは

さんごく いちえんぶだい ひと さんげめつざい かいほう

これなり。三国ならびに一閻浮提の人の懺悔滅罪の戒法の

だいぼんてんのう たいしやくとう らいげ ふ たも かいだん

みならず、大梵天王・帝釈等も来下して踏み給うべき戒壇

なり。

この戒法立つて後、延暦寺の戒壇は迹門の理戒なれば益

あるまじきところに、叡山の座主始まつて第三・第四の慈

覚・智証、存の外に本師たる伝教・義真に背いて、理同事勝

の狂言を本として、我が山の戒法をあなずり戯論とわらい

し故に、存の外に、延暦寺の戒、清浄無染の中道の妙戒

なりしが、いたずらに土泥となりぬること、云つても余り

あり、歎いても何かはせん。彼の摩黎山の瓦礫の土となり、

梅檀林の荆棘となるにも過ぎたるなるべし。夫れ、一代

しようぎよう

じゃしよう

へんえん

わきま

かくしや

ひと

いま

聖教の邪正・偏円を弁えたらん学者の人をして、今の

えんりやくじ

かいだん

ふ

延暦寺の戒壇を踏ましむべきか。

ほうもん

ぎり

あん

ぎ

詳

この法門は、義理を案じて義をつまびらかにせよ。

さんだいひほう

にせんよねん

そのかみ

じゆせんがい

じようしゆ

この三大秘法は、二千余年の当初、地涌千界の上首とし

にちれん

きようしゆ

だいかくせそん

くけつ

そうじよう

いま

て日蓮たしかに教主・大覚世尊より口決せし相承なり。今、

にちれん

しようぎよう

りようじゆせん

ほんじよう

けに

そうい

日蓮が所行は、霊鷲山の稟承に介爾ばかりの相違なき、

いろ か

じゆりようほん

じ

さんだいじ

色も替わらぬ寿量品の事の三大事なり。

と

いちねんさんぜん

まさ

しようもん

問う。一念三千の正しき証文いかん。

こた

つぎ

もう

い

にしゆあ

答う。次に申し出だすべし。ここにおいて二種有り。

ほうべんぽん い しょう じつそう しょう によぜそう

方便品に云わく「諸法の実相とは、いわゆる諸法の、如是相

ないししゅじょう ぶちけん ひら ほつ とううんぬん ていげ

乃至衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云々。底下

ぼんぷりしやうしよぐ いちねんさんぜん じゆりやうほん い

の凡夫理性所具の一念三千か。寿量品に云わく「しかるに、

われ じつ じやうぶつ このかた むりやうむへん とううんぬん だいかく

我は実に成仏してより已来、無量無辺なり」等云々。大覚

せそんくおんじつじやう そのかみしやうとく いちねんさんぜん いま にちれん とき

世尊久遠実成の当初証得の一念三千なり。今、日蓮が時に

かん ほうもんこうせんる ふ

感じて、この法門広宣流布するなり。

よ としころ こしん ひ ほうもん か つ とど

予、年来己心に秘すといえども、この法門を書き付けて留

お もんけ ゆいていとう さだ むじ ひ ざんげん くわ

め置かずんば、門家の遺弟等、定めて無慈悲の讒言を加う

のち なん く かな ぞん

べし。その後は何と悔ゆとも叶うまじきと存ずるあいだ、貴

へん たい か おく そうろう いっけん のち ひ たけん あ
辺に對し書き送り候。一見の後、秘して他見有るべから
ず。口外も詮無し。法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給い
そうろう さんだいひほう ふく きょう たま
て候は、この三大秘法を含みたる經にてわたらせ給え
なり。秘すべし、秘すべし。

うづきようか

卯月八日

にちれん

かおう

日蓮

花押

おおたきんごどのごへんじ

大田金吾殿御返事